

日本語検定受験を通じた課題解決方法の実践事例 ～学生リーダーの新たな方向性～

廣田 有里

メディアコミュニケーション学部

林 香織

メディアコミュニケーション学部

要 旨

本学では2008年度から「学生リーダー」という組織が導入され、新入生のサポートやボランティア活動に当たっている。本年は学生リーダー全体に「日本語検定」受験を導入し、自身の苦手を意識し、合格に向けて何をすべきかという意味での問題解決方法を学ぶプログラムを実施した。結果、組織的に受験に取り組むことで、検定受験に対するハードルが低くなり、受験率が増加する成果がある一方で、集合的学習の意義を感じない、目標到達のための計画が立てられないという問題点が明らかになった。また、受験者を個別に比較すると、3級合格より2級合格という高い目標を設定した方が、学習に対するモチベーションが高く、学習が持続することが分かった。

キーワード：日本語検定、リメディアル教育、学び合い、学習支援

はじめに

2008年度から導入された本学の「学生リーダー」は、当初「社会人としての最低限のマナーを身に着ける」、「自己を見つめ直し、自己理解を深めることによって、他者を意識する」といったプログラムによって、学生達のトレーニングが行われてきた(廣田ら,2013)。優秀な学生リーダーが排出される一方、リーダー組織としては非常に内向きなコミュニティとなり、リーダー以外の学生に目を向けられているか、といった課題を抱えることになった。

2014年度から、従前のプログラムの見直しをはかり、「学生リーダーは大学組織としてどうあるべきか」を学生と共に試行錯誤しながら、本学の教育理念である「人間陶冶(人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成)」を体現するような学生を育てることに注力している。

変革の初年度である2014年度は、「学生リーダーとは何であるか」を考えるためのプログラムを準備した。合宿だけではなく、通常の授業期間内に月1回の「ランチミーティング」を導入することで「話し合う力」を強化し、協力して一つの方向性へ向かう姿勢を身に着けた。年度終わりに向けて、自分達の活動と学内での位置付を考え、活動記録を紹介する広報雑誌を作成する課題を与えたところ『ガクリコネクト』を作成した。彼らは活動を通じて、学生リーダーのあるべき方向性を、学内の中で「コネクト(つながり)」を作り出すべきだと考えていることがわかった。

そのため2年目となる2015年は、彼らの想いを形にすべく、新入生ガイダンスのみならず、学内の人材をまとめあげる力を身につけるために「流山市民まつり」のボランティアリーダーを、学生リーダー中心に引き受け、マニュアル作りなどに取り組んだ。先輩から後輩へ引き継ぐべき連絡事項や反省点を「マニュアル」に盛り込み、システムティックな引き継ぎが行えるように工夫を凝らした点などは、前年の「話し合う力」の養成による成果といえる。また、マニュアル作成を通じて、人に伝えることの難しさを実感し、説得するための技術などを学びたいといった、自身の成長を促すような学びに対する要望が出始めたことも、変革の一端といえる。

組織としてのまとまりが出てきた一方、追いつかないのは、個人としての目標を見定めてそれを達成するための努力が出来るかという点である。問題を問題として意識し、その解決方法を見出すことは、経済産業省が平成18年に定義した「社会人基礎力」¹の能力要素の一つとして捉えられている。そこで、本年は学生リーダー全体に「日本語検定」受験を導入し、自身の苦手を意識し、合格に向けて何をすべきかという意味での問題解決方法を学ぶプログラムを準備した。本稿はその成果をまとめたものである。

1. 研究背景

日本リメディアル教育学会の専門部会である日本語部会は、大学生の学力低下について、「大学生の全ての学力を支えるのは日本語の力」と規定し、「多くの大学に日本語力が中学生レベルしかない学生の存在が

認められて」いるため、大学における日本語力向上を目指す教材を作成している²。確かに、本学が初年次教育として開学以来設けてきた「基礎ゼミナール」も、高校から大学への橋渡しとしての役割もさることながら、多くの時間をリメディアル教育に割かねばならなくなっている。

実際、大学生の88%は自分自身の日本語力を不十分であると思っているという調査結果もある(高瀬, 2012)。しかし、同調査結果によると、不十分であることに對し、何か具体的な努力をしていると回答した学生は、2割程度にとどまっている。

こうした現状の打開のため、各大学において、様々な検定や資格支援が導入されている。代表的なものは、公益財団法人日本漢字能力検定協会主催の「日本漢字能力検定(漢検)」や、「文章読解・作成能力検定(文章検)」である。本学でも、基礎・教育教養センターを中心に、1群科目の日本語教育の見直しをはかり、2014年度入学者以降は「ことばと表現(書き言葉/話し言葉)」という科目を設置し、基礎的な日本語教育から学術的専門性に耐えうる文章表現能力を養うことを必修化した。その時に同時に検討されたのが、前述のような検定受験の導入である。資格取得を目指すことで、学生自身の目標が設定しやすくなること、就職活動を見据えた場合のメリットなどが挙げられる。「漢検」は高校までに取得している人も多く、身近な検定である一方、「文章検」は、読解・作成力が問われるため、自己学習するのがハードルと考えられた。そこで、特定非営利法人日本語検定委員会が主催する「日本語検定」に着目した。メリットとして①日本語の総合的な能力を、漢字・敬語・文法・表記・語彙・言葉の意味の6分野からの出題により、判定していること、②6分野の判定結果がフィードバックされることにより、弱み強みを視覚的に判断することができること、③6分野の提示により、自己学習が進めやすいこと、④文部科学省、日本商工会議所などの後援もあり、認知されている検定であること、⑤日本商工会議所、経団連事業サービスの後援により、就職活動時における筆記試験免除など、具体的なメリットが得られる点、などが挙げられる。

受験人数の増加、また勉強方法の確立を促進し、「ことばと表現」のカリキュラムとの連動性を模索するためにも、まずは受験した学生の成功、失敗事例を探ることが先決である。そのため、学生リーダーには、自分たちの到達目標を自分で決め、そこを目指して、努力することを、「日本語検定」を素材に学んでもらうことにした。本稿は、その成果報告である。

2. 先行研究

大学における日本語検定の導入事例は、リメディアル教育の観点からの報告が多い。加藤によると、日本語検定の受験に関し、2級と3級の合格の間には大きなレベル差が存在しているという(加藤, 2013)。日本語検定では、7～1級の受験級が設けられており、大学生は、高校卒業程度レベルの3級、大学卒業程度レベルの2級の受験を目指すのが妥当である。だが、2級合格者によると3級は「日常レベルで対応可能」なのに対し、2級は「分からない単語が多くしっかり勉強しないと受からない」のだという(前掲)。問題は「しっかり勉強」という中身にあるが、そのためには「理解」→「整理」→「暗記」のプロセスの重要性が指摘されている。

日本語検定のメリットは、「整理」の段階において6つ領域別得点を知ることができるという点にある。日本語検定委員会によると、「敬語では得点差が比較的少ないものの、語彙や表記で大きい」ということが指摘されている(山下, 2012)。受験後のフィードバックでは、レーダーチャートとして、視覚的に分野別の得点を確認することができる。学生達の自己学習を支援し、「整理」する意味で、6領域の得点が視覚的に表現されるようなe-ラーニングシステムを構築することとした。

3. 受験までの流れ

3-1 日本語検定受験までのプロセス

目標を設定し、それに向かって努力する力を身につけるためのプロセスとして、以下の3ステップを考えた。

1. 可視化することができる到達目標を自分で設定する
2. 設定した到達目標に対して自己学習を行う
3. 集合して学習することにより、教え合う意識の気づき生まれる

本研究における仮説として、「『可視化することができる到達目標を自分で設定する』プロセスを体験させるために、検定試験は有効に働く」ことを検証していきたい。一般的に「成長」を実感することは難しいが、勉強した成果が可視化されるという点で、検定に合格するということは分かりやすい。そこで、まず、自分で到達すべき目標として、「日本語検定2級に合格」等の目標設定を第一ステップとした。なお、学生リーダーのプログラムとして導入するため、学生達には、「合格」が到達目標にならないよう、あくまでも

「検定」は手段であるという位置づけであることを強調した。また本学の資格支援制度によって、日本語検定2級以上の合格者に対して、報奨金3万円が授与される。参考書の購入や受験に関する金銭的負担を軽減することにより、学生のモチベーションを上げる効果も期待できる。

自身の目標を設定したら、「設定した到達目標に対して自己学習を行う」ステップへ進む。学習スペースと練習問題を大学側で準備し、過去問題、例題を中心に出题範囲を繰り返し鍛錬できるようにする。説明や講義より、むしろ「自己学習による理解」に重点を置いた鍛錬を行う。学習スペースを確保することにより、「集合して学習することにより、教え合う意識の気づきが生まれる」ことを期待する。進捗状況や目標に到達するまでの過程を共有しあうことで、脱落者をフォローし、助け合うことの大切さへの気づきを持ってもらいたい。

3-2 受験までの流れ

受験までの大まかな流れを以下の表1に示す。

6月のランチミーティングにて、学生リーダーが今後、学習支援という活動を行っていくために日本語検定の取得が必要であること、日本語検定を受検することは、学生リーダーに本来必要である「自己の目標を設定し、計画を立てて実行する力」を養うためにも有効であることを説明し、学生リーダーが日本語検定を目指す意義と今後の方向性について話をした。学習支援という言葉から、「勉強を教える」立場になることに疑問や不安を呈する学生もいたが、「勉強を教える」のではなく、「目標を設定し、計画を立てて実行する方法を一緒に考える」立場なのだとして説明し、それは今までの学生リーダーの方向性と合致していたため、納得して日本語検定に挑戦することに賛同してもらった。

方向性が決まってから、学習スペースの確保と自己学習のための環境づくりを開始した。学習スペースとして、学生リーダーが履修登録期間に新入生の相談を

表1 受験までの流れ

日程	内容
6月3日(水)	ランチミーティングにて、今後の学生リーダーの方向性の発表
6月～	学習スペースの使い方の調整(開室日時の決定) 学習支援システム(エドクラテス)の準備 自己学習開始
9月	合宿での集中学習
11月7日(土)	受験日

受けている部屋を、時間と曜日を決めて借りることとした。この部屋では火曜日と木曜日に「文章ラボラトリー」という、文章に関する何でも相談ルームを開室しており、退官した教員が指導に当たっている。この点からも、日本語を勉強したい・勉強する必要性を感じている学生が集まる下地ができており、適しているといえる。学習支援スペースを借りるにあたり、「学習支援室利用規定」を設け、ルールを守って利用するようにもした。

自己学習のための環境づくりとして、本学で使用している学習支援システム「エドクラテス」(moodle)に日本語検定学習のための教材や、過去問題の結果を分野ごとにグラフ化して自分の苦手を分かりやすくするExcelのワークシートを用意した。教材を学習支援システムに準備したことを告知し、自己学習を促した。

9月に毎年行っている学生リーダーの夏合宿では、「課題解決力」を目標とし、日本語検定合格も課題のひとつとしてとらえ、目標設定と計画・学習の方法を指導した。具体的な内容は「3-3 夏合宿の集中勉強プログラム」に詳述する。

合宿終了後、合宿に参加できなかった学生には、合宿の内容を短縮したプログラムを行い、足並みをそろえてから自己学習と集合学習を促した。

3-3 夏合宿の集中勉強プログラム

個人としての問題解決力を要請することを目標に、2015年の夏合宿から日本語検定に向けてのプログラムを開始した。夏合宿は、夏季休暇期間である9月1日～3日の3日間で、国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊して実施した。

夏合宿のプログラムを図1に示す。

夏合宿の目標は、「前年からの「話し合う」「伝える」力の強化だけでなく、本年度の目標である「課題解決力」を鍛え、一人一人の目標に向かって努力する。」とし、グループとしての課題を「市民まつりボランティアをよりよく運営する」、個人としての課題を「日本語検定合格」に設定してプログラムに取り組んだ。

その中での、日本語検定に関するプログラムについて、以下に詳細を説明する。

①1回目日本語検定プレテスト

現在の自分の実力と苦手を知るために、日本語検定の過去問題を検定と同じ時間配分で行った。合宿中に2級と3級のプレテストを1回ずつ行うことと、2級と3級のレベルと難易度を説明し、どちらを先に受験するかを自分で選択した。レベルと難易度は、日本語検

	9:00～10:00	休憩	1限 10:10～11:00	休憩	2限 11:10～12:00	昼食	3限 13:10～14:00	休憩	4限 14:10～15:00	休憩	5限 15:10～16:00	休憩	6限 16:10～17:00	休憩	7限 17:10～18:00	夕食	放課後 19:00～21:00
1日目 9月1日	施設説明 合宿の概要説明		目標設定 学生リーダーとは (4月の反省)		自己紹介 スピーチ		プレテストの結果フィードバック		流山市民まつり の概要説明		流山市民まつりの各部署の担当者決め 部署ごとに打ち合わせ		日本語検定 プレテスト 日誌の記入				日本語検定 プレテスト 日誌の記入
	宮崎・廣田		廣田・黒崎		廣田		外部講師		廣田		廣田・林		廣田・林				廣田・林
スポーツ棟第1研修室																	
2日目 9月2日	発声法 声だし訓練		プレゼンテーショ ンの技法		プレゼンテーショ ンの技法		日本語検定 目標決めと計画		課題解決法1 苦手克服までの プロセスを考える		課題解決法2 苦手克服までの プロセスを考える		日本語検定の ウィークポイント 発見	夕食	自己学習方法の 見直し		日本語検定 プレテスト 日誌の記入
	(廣島)・黒崎		廣田		廣田		廣田・林		林		林		廣田・林		廣田・林		各自
センター棟415			センター棟415			センター棟411			センター棟411			センター棟511					
3日目 9月3日	発声法 声だし訓練		過去2回のプレテ ストの振り返り		苦手パートの 反復練習		学習支援室の 使い方、ルール 決め		市民まつりボランティアの集め方とガイダ ンス方法の検討		日誌の記入 合宿の反省 後半の活動確認						
	(廣島)・黒崎		廣田・林		各自		廣田		廣田・宮崎								
センター棟414			センター棟414			センター棟509			センター棟509			センター棟509					

図1 夏合宿スケジュール

定の案内に記載されている内容より、2級は大学卒業程度のレベルで26年度第2回の合格率は18%であり、3級は高校卒業程度のレベルで26年度第2回の合格率は55%であると説明した。

テスト結果は自己採点し、あらかじめ用意しておいたExcelシートに結果を記入した。Excelシートは、領域ごとの正答数を記入すると自動的にグラフにして表示するように作成した。Excelシートの入力例を図2に示す。左の表の「正答数」を入力すると正答率を計算し、自動的に右のグラフを表示する。グラフ化することにより、自分の苦手分野を直ちに認識・把握することが狙いである。

11名受験したうち、7名が2級、4名が3級を最初のプレテストで受験した。

②日本語検定目標決めと計画

1回目のプレテストの結果を踏まえ、2級受験と、3級受験のどちらに挑戦するか目標設定を行った。目標設定するに当たり、日本語検定合格を手段とするために、自分が日本語検定を目指すことの意味を考えて、取得の目的を明らかにするように設定させた。

目標を立ててから、日本語検定までのスケジュールを決めた。スケジュールを立てるポイントとして、行うページ数や単元などを具体的に記入することと、日ごとに毎日同じ量を配分するのではなく、自分の他のスケジュールと合わせて可能なスケジュール設定することを伝えた。フォーマットとして、1列目に「やるべき勉強」を記入し、以降の列の日付の部分に、行う分量を記入する方式のExcelのフォーマットを用意したが、自由フォーマットでも記述して良いこととした。

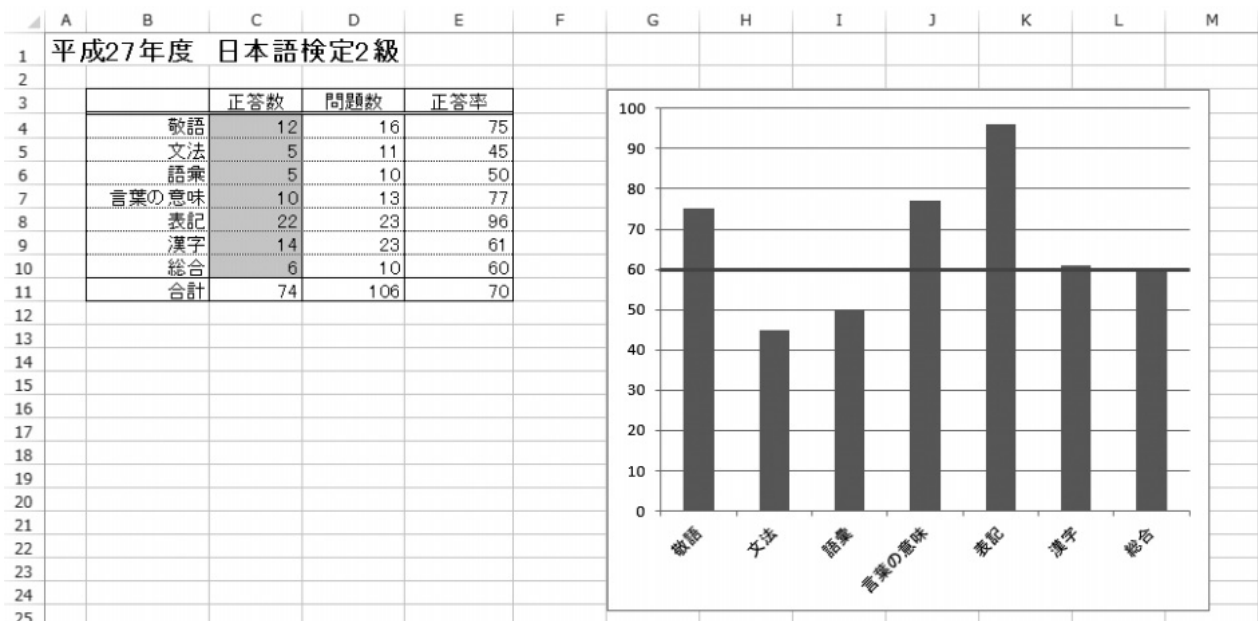


図2 領域ごとのグラフを表示するExcelシート

③課題解決法

苦手克服までのプロセスを考えることを目標に、講義と演習を交互に行いながら、例としてあげた課題の解決方法を考えていく。本合宿の目標である課題解決力を鍛える要となる講義である。

最初の演習は、レポートのテーマを例に、テーマの粒度を落とし、具体的な解決方法を挙げられるテーマを探して問題を具体化する方法を体験した。次に、学生リーダーがグループとして取り組む課題である流山市民まつりについて、問題点を具体化して解決方法を考えた。最後に、学生リーダーが個人の課題として取り組んでいる日本語検定について、問題点を具体化し、解決方法を考えた。

④日本語検定のウィークポイント発見

「③課題解決方法」で個人として日本語検定の課題と解決方法を考えたところで、グループワークで、各自が自分の問題を解決する答えを見つける時間を設けた。課題を共有し、他の人の解決方法を聞くことで、新たな解決方法を発見して応用することができることが狙いである。

話し合いの結果をグループごとに発表することにより、全体での共有も図れた。

共有する問題は似ているが、解決方法はグループでさまざまであり、新たな発見につながったと思われる。

⑤自己学習方法の見直し

「④日本語検定のウィークポイント発見」で新たに発見した解決方法を踏まえ、「③課題解決方法」で考えた日本語検定の課題の解決方法をブラッシュアップし、具体的な計画実行を書けるようにする。

本来は「②日本語検定目標決めと計画」で作成したスケジュールを具体的に修正する予定だったが、「③課題解決方法」で考えた日本語検定の課題の解決方法をブラッシュアップするにとどまった。やはり、スケジュールのフォーマットに追加情報が記入しにくく、具体的に落とし込みにくいことが原因のひとつと考えられるので、今後はフォーマットを工夫したい。

⑥2回目日本語検定プレテストと振り返り

2回目の日本語プレテストでは、1回目で選択しなかった級のテストを行った。1回目と同様、Excelでグラフ化して現状を把握した。

過去2回のプレテストの結果から受験級を見直し、目標の表明を行う。目標、克服したいところを明確にしてスピーチを行うことにより、自分のやるべきこと

を明確にして目標達成のステップにすることが狙いである。

⑦苦手パートの反復練習

今後の自己学習の方法を習得し、習慣づけることを目的に、苦手パートの反復練習を行った。各自に自己申告した苦手パートの問題を配布し、時間を決めて問題を解き、答え合わせをする。間違った問題は、皆で見直しを行った。反復練習により、同じ問題を間違える傾向が明らかになり、結果を集積していくことにより、今後、日本語検定対策の情報が蓄積できるメリットも考えられた。

⑧学習支援室の使い方、ルール決め

学習支援室の今後の利用方法を周知し、皆で集まって勉強するルール作りを行った。皆で集まって勉強することにより、「⑦苦手パートの反復練習」で行ったような問題の共有や、一人ではくじけてしまう勉強の支え合いが行えることを目的としている。

しかし、「まとめと今後の展望」でも述べるが、合宿の環境での集合学習は効率よく支えあう体制が作れたが、大学に戻ってからの支え合い学習は実現していない。これにはいろいろな要素が関係しているが、合宿でのプログラムでいえば、支え合い学習の時間を増やし、支えあいの実感が湧く必要があったと考えられる。

3-4 自己学習のための学習支援サイトの設定

本学では学習支援システムとしてMoodleを導入し、「エドクラテス」というシステム名で運用している。エドクラテスは、普段の講義の教材配布や課題提出に利用されている。

日本語検定対策にもエドクラテスを使用し、教材やテスト結果記入のExcelシート、スケジュール管理のExcelシート等を掲載し、本学の日本語検定受験者が誰でもアクセスできるようにした。苦手パートの反復練習ができるように、過去問だけでなく、パートごとの問題も準備した。

4. 受験結果

3級受験者2名、2級受験者8名の結果を報告する。このうち、合宿参加者は2級受験の6名である。

3級の受験者の分野別の得点率を図3に、2級の受験者の分野別の得点率を図4に示す。比較として、大学・高等専門学校の平均得点率を示す。

3級受験者の得点率は、大学・高等専門学校平均よ

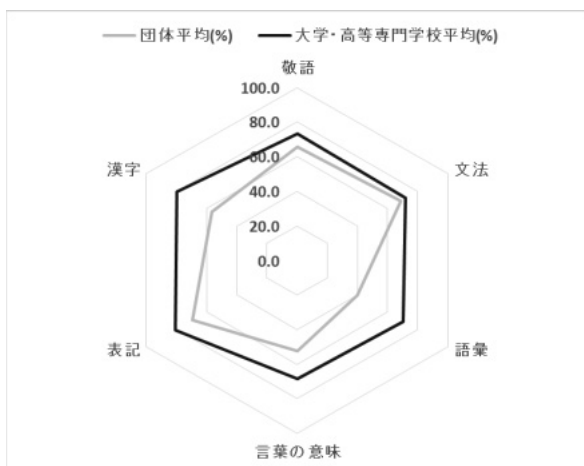


図3 3級受験者の分野別得点率

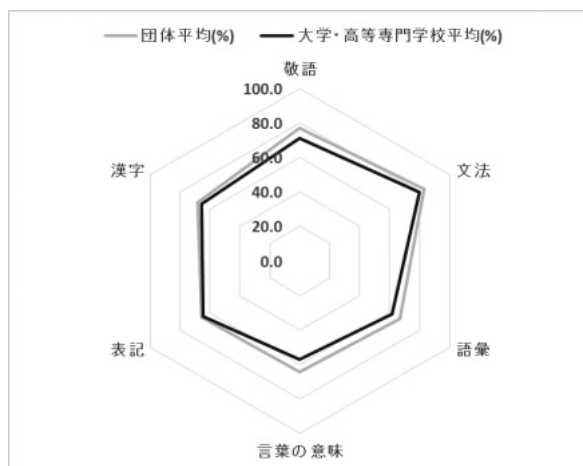


図4 2級受験者の分野別得点率

りどの分野も下回っていることが分かる。3級受験者の2名は、合宿には参加せず、1日に短縮して実施した「合宿不参加者のためのプログラム」に参加し、受験に臨んでいる。合宿不参加者のためのプログラムでは、「①1回目日本語検定プレテスト」と「②日本語検定目標決めと計画」しか行えなかったため、プログラム実施後の自己学習につながらなかったと考えられる。

2級受験者の得点率は、どの分野でも大学・高等専門学校平均より上回っている。団体平均は70.5%と大学・高等専門学校平均の66.6%より高い。残念ながら、2級合格者1名、準2級合格者1名だったが、最低得点率64.2%からも分かるように、不合格者も全員60%以上の得点率を獲得している。準2級合格までもう一歩であったことが分かる。

以下に、3名の学生について具体的にプレテストの

得点率、目標設定と計画、本番の日本語検定の得点率について検証していく。

準2級に合格した学生Aについてのプレテストの得点率、目標設定と計画、日本語検定の得点率は以下のようになっている。学生Aは、学内のさまざまな活動団体に所属して長や責任のある役割を務めている。

プレテストは1回目に2級を受験し、64%の得点率であった。目標設定後に行った2回目のプレテストでは3級を受験し、84%の合格圏の得点率を出している。

プレテストの結果より2級合格を目標設定し、「就職の強みにする。自信を持って、どんな場面でも正しい日本語を操れるようになる。文学を楽しく読む！」ことを目的としている。図5に学生Aが作成したスケジュールを示す。自分の他のスケジュールを考慮し、分野ごとに学習時間(図内の20や30は分を示す)を設

日本語検定 対策スケジュール												
			予定	学習内容(分)							備考	
				敬語	文法	語彙	言葉の意味	表記	漢字	総合		
9月	4	金	×15-23									
	5	土	×9-17					30	30			書き中心
	6	日						30	30	30		書き中心
	7	月	帰省	20	20	30	30					新幹線でもできるもの
	8	火	帰省									
	9	水	帰省									
	10	木	帰省	20	20	30	30					新幹線でもできるもの
	11	金	×17-23					30	30			書き中心
	12	土	×14-17			30	30					
	13	日	×8-12					30	30	30		書き中心
	14	月	×15-23	30	20							
	15	火										一通りテスト
	16	水	×15-23			30	30					
	17	木										一通りテスト
	18	金	×15-23					30	30			
	19	土	×8-17						30	30		

基本30分区切り。でき次第で前後する。

図5 学生Aの計画した学習スケジュール

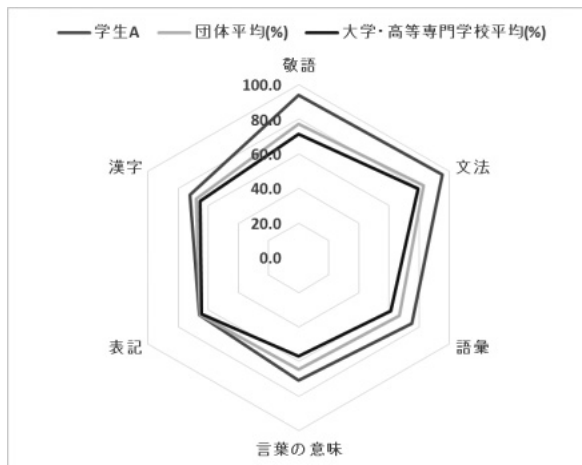


図6 学生Aの得点率

定している。

学生Aの得点率を図6に示す。総得点率は77.7%で、プレテストから21.4%の伸び率となっている。

今回不合格ながらも、資格取得への意欲が最も高く、目的意識を持って行動している学生Bについてのプレテストの得点率、目標設定と計画、日本語検定の得点率は以下のようにになっている。

プレテストは1回目に2級を受験し、55%の得点率であった。

2級合格を目標設定し、「人生で必要なことなので、一生忘れないように。声に出して覚えよう！今の一番になりたい気持ちを忘れず、学習に励みます。」とい

う目的を設定している。図7に学生Bが作成したスケジュールを示す。分野ごとに時間を設定しているが、1日の学習時間が長く、長い学習時間の中身が具体化されていないので、実現性に欠けている。

図8に学生Bの得点率を示す。総得点率は66.5%で、プレテストから20.9%の伸び率となっている。本人へのインタビューで、プレテストで苦手が浮き彫りになった語彙と漢字に関して集中的に繰り返し学習を行ったことを聞いている。苦手分野に関して大きく点を落とすことはなかったが、全体として平均点に収まり、合格は望めなかった。

3級を受験して不合格だった学生Cについてのプレテストの得点率、目標設定と計画、日本語検定の得点率は以下のようにになっている。学生Cは合宿に参加しておらず、短縮プログラムのみ受講している。

プレテストでは3級受験を選択し、59%の得点率であった。

3級合格を目標設定し、「卒業後、社会に出て困らない・恥ずかしくないように敬語や語彙力や漢字を身に付けたい。就職活動で役に立つ検定が欲しい。まずは3級合格を目指す、最終的には2級合格を目標としている。」という目的を設定している。

図9に学生Cの得点率を示す。総得点率は50.6%で、プレテストから-14.2%の伸び率となり、得点率が下がっていることが分かる。低い目標設定ではモチベーションがあがらず、学習につながらなかったことが分

	9月16日	9月17日	9月18日	9月19日	9月20日	9月21日	9月22日	9月23日	9月24日	9月25日	9月26日	9月27日	9月28日	9月29日	9月30日
語彙	三時間	二時間	二時間	一時間											
文法		三時間	三時間	二時間	四時間	三時間									
敬語							三時間	三時間	三時間	三時間					
言葉の意味											二時間	四時間	三時間	一時間	三時間
表記															
漢字															
総合															

図7 学生Bの計画した学習スケジュール

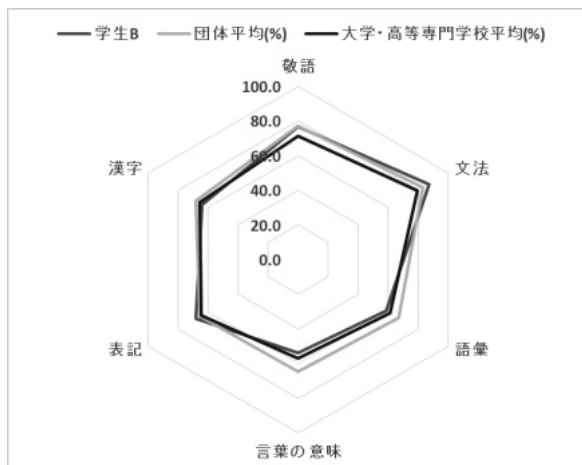


図8 学生Bの得点率

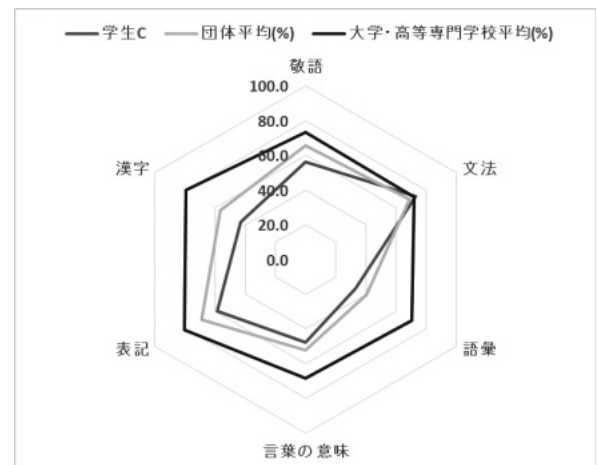


図9 学生Cの得点率

かる。

2級受験者は合宿参加者が大多数で、受験後のインタビューでも、合宿後の自己学習を行っていたことがわかっている。自己学習の方法としては、「過去問題を3回分実施した」「テキストを分野別に繰り返し行った」などがあり、テキストを繰り返し行った場合も、間違った問題のみ繰り返し行う学生と、全問を繰り返し行う学生など、方法は多岐に渡った。しかし、残念ながら集合しての学習は行われなかった。

まとめと今後の展望

「課題解決方法」としての日本語検定受験プログラムを導入した成果と問題点として、以下が挙げられる。

1. 「学生リーダー」として受験することで、「検定」に対するハードルは低くなること。
2. 集まって勉強するという学習形態を維持できない。
3. 目標に到達するための計画を立てられない。
4. 高い目標を設定した方が、モチベーションが高く学習が持続する。

資格支援制度を準備しても、受験人数は増加せず、金銭的な援助は実は学生のインセンティブになりにくい傾向にあったが、今回、「学生リーダー」という組織として受験を促したところ、昨年の受験者2名から10名に増えた。一緒に受験するという感覚は、検定に対するハードルを下げたが、一方で、集まって勉強するという学習形態には馴染めない傾向が見出された。合宿中は、お互いにできない箇所や、勉強方法などを話し合いながら学習するということが出来ており、励ましあう、支え合うといった感情的な面の繋がりを本人達も感じる一方で、日常生活に戻ると、「検定の勉強」は一気に優先度の低いものになってしまう。勉強とは一人で落ち着いた環境ですべきものとい

う概念にとらわれており、集合して学習することに意義を感じていない傾向にある。わからないところを教えあうことで得られる気づきを得るという学習方法をとるべく、学習環境の整備が必要になってくる。

また、本プログラム導入によって最も学生達が躓いた部分が、「目標到達のための計画を立てる」ことにあった。克服すべき課題の設定、いつまでに何を行うべきか、これを時系列に沿って並べ、それを実行していくことの難しさを痛感したようだった。社会人基礎力としての課題解決として本プログラムを導入する意義は、この部分にあるわけだが、目標到達までのプロセスを分解して組み立てていくことを今後の課題としたい。

参考文献

- 加藤良徳, 2013, 日本語検定2級合格者はどのような体験をしているのか—中堅私立大学学生(文系)の場合—, 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要第10巻, 47-58
- 高瀬真一, 2012, 大学生の日本語力—今、なぜ大学生に日本語検定なのか—, 秘書サービス接遇教育学会研究集録第18号, 76-78
- 椿ますみ, 2011, リメディアル教育としての検定受験指導の有効性, 修文大学短期大学部紀要第50集, 53-60
- 廣田有里・黒崎輝人・佐藤毅, 2013, リーダーシップ力育成プログラムの実施と効果の検討, 江戸川大学紀要 23, 47-51
- 山下幸, 2012, 「9割が力不足を認識、努力は2割以下」, 『中外教育』, 時事通信社, 11
- 1 経済産業省
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf
 - 2 日本リメディアル教育学会
<http://www.jade-web.org/jade/specialty/nihongo.html>